書　評

吉見俊哉『「文系学部廃止」の衝撃』（集英社新書　2016 年）

アスキュー・里枝

二〇一五年六月八日、文部科学省は国立大学法人に対して国立大学法人の「組織及び業務全般の見直し」について通知した。これは、産業界や大学の国際競争において即戦力となる理系を重視する内容だったために、「文系学部廃止」として受けとられ、「現代の焚書」や「大学自治の侵害」だという批判が巻き起こり、文系擁護の言説が方々で登場した。メディア論などで名高い吉見俊哉の近著『「文学部廃止」の衝撃』もまた、文系擁護に一石を投じた興味深い一冊である。

吉見によれば、日本における「文系不要論」は今に始まったことではない（77 頁）。戦後の大学政策は、一貫して「文系軽視」・「理系偏重」を行っており、二〇〇四年の国立大学法人化がそれをさらに促したという（28、33 頁）。国立大学の教員は四人に三人が理系で、経済発展に貢献できる「役に立つ」理系が重視され、貢献できない「役に立たない」文系が蔑ろにされてきた。吉見の批判の矛先が、こうした理系偏重の大学政策（や社会風潮）に向けられていることはいうまでもない。といっても彼の場合、文系の中で淘汰されるべき学部があると認識している点において、文科省の「見直し」に全く無理解なわけではない（119 頁）。それどころか、グローバル・スタンダードには敏感で、アクティブ・ラーニングやダブル・メジャー制度の導入など、大学改革には積極的である。

ところで吉見自身も指摘するように、「文系」の中身は曖昧であり、現存する文系学部の中には、「一般教育」や「共通教育」、「教養」など様々なものが入り混じっている（78 頁）。にもかかわらず文系擁護論では、しばしば「文系」は「教養」と同一視され、教養主義的観点から実用主義批判がなされることが多い（76 頁）。しかし、吉見の文系擁護には、こうした教養主義的響きはない。これは、彼がそもそもいわゆる教養主義者ではないことにも関係があるが、何よりも、「文系は役に立たないけれども価値がある」、という意見に与しないことに起因している（64 頁）。というのも、そのような意見は、文系不要論者の立場と同様、「文系は役に立たない」という前提に立っているからである（250 頁）。吉見は敢えていう。文系は「役に立つ」、と。

もちろん吉見のいう「役に立つ」は文系不要論者（理系偏重者）のいう「役に立つ」とは意味が違う。彼によれば「役に立つ」ことには二つの次元がある。一つは「理系的な知」で、「目的が既に設定されていて、その目的を実現するためにもっとも優れた方法を見つけていく目的遂行型」で、より速い新幹線や、より高性能のカメラなどはこうした知から生まれてくる（69 頁）。もう一つは「文系の知」で、「役に立つと社会が考える価値軸そのものを再考したり、新たに創造したり」して、目的自体を考え直し、創造する「価値創造型」で、ソニーのウォークマンがアップル社の iPad に負けたのは、こちらの知を欠いていて、世の中の価値軸の変化に対応できなかったからだという（70 頁）。

この擁護論は、文系の正当化を図るための吉見の戦略なのかもしれないが、「文系の知」を経済至上主義の産業界の言葉に翻訳してしまった感がある。もちろん「文系の知」が、結果として産業社会にとって有益なものになりうることは事実であろうし、喜ばしいことでもある。しかしこれは、「文系の知」の中で瑣末なメリットに過ぎない。「文系の知」の本質は、私見では、人間に深みと幅を与え、人間を人間として完成するものである。もし吉見自身がいうように、「役に立つと社会が考

える価値軸そのものを再考したり、新たに創造したり」するのが本当に「文系の知」ならば、産業界における有用性を主張するよりも、そうした発想の貧しさを指摘することにこそ意義があるのではないか。

実は大学政策における文系縮小・廃止論は、今日、日本だけでなく海外でも見受けられ、英米では、「人文学に対する戦争」（the war against the humanities）とか「人文学の危機」（the crisis of the humanities）（後者は日本でも最近よく使われている言葉だが）と呼ばれて話題になっている[1)]。日本と同じく、文系不要論者の議論は、経済至上主義に基づき、「役に立たない」文系は縮小・廃止して大学の、ひいては国の効率化を図るというものであるが、これに対する文系擁護論者の議論には大別して二つの特徴がある。一つは、経済至上主義そのものに対して疑問を投げかけ、世の中には数字では計ることのできない価値があり、それを守るのが大学であり、人文学であると訴えていること。もう一つは、人文学の「批判的思考」（critical thinking）や読み書き能力が社会に「役に立つ」ことを強調し、人文学が心を豊かにするばかりでなく、（時として）経済の発展にも有効であることを力説していることである。

大学が「人類や地球社会の普遍的な価値のために奉仕する知の制度」であり、「文系の知」が結果として経済にも「役に立つ」という吉見の立場は、海外の文系擁護論者と同じ流れを汲むものである（67 頁）。吉見にしても海外の論者にしても、彼らの議論は大体において正論だと思うが、文系の正当性を主張するために、「役に立つ」（それが文系的な意味であっても）ということを強調し過ぎているきらいはあるのは気になるところだ。

もっとも吉見自身、有用性を強調し過ぎたと思っているようで、最後の章で、本書の一貫した主張である文系有用論とは矛盾しないとしながらも、「大学の知、とりわけ文系の知の根底」には遊びが必要である、とホイジンガ（Johan Huizinga, 1872-1945）流の遊びの大切さを説いている（245 頁）。吉見によれば、遊びこそが人間を人間らしくし、創造性の源なのである。評者はこれに大いに賛成であるが、人間を人間らしくするものとして、さらにもう一つ美しいものに触れることの重要性も加えたい。ここにシュトラウス（Leo Strauss, 1899-1973）の有名な一節を引かせてもらおう。

> 「一般教養教育は粗野であること（vulgarity）からの解放である。ギリシア人たちは、『粗野であること』という言葉の代わりに、一つの美しい言葉を持っていた。それはアペイロカリア（apeirokalia）すなわち美しき事柄における経験の欠如と呼んでいたのである。一般教養教育は、われわれに、この美しき事柄における経験をなさしめるものなのである」[2)]。

スクルートン（Roger Scruton, 1944-）もいうように、美しい芸術作品に触れるとき、人は感動し、それ自体で満たされる。そこには何の有用性も功利性も存在しない[3)]。それは、母親が赤ん坊を前にして幸せに満たされるのと一緒である。動物にとって美とは、雄の孔雀が雌を惹きつけるために尾を広げる有用の美でしかない。しかし人間には利己心や有用性を離れ、神聖さへと近づく無用の美がある[4)]。そしてこれこそが人間を人間らしくするものなのである（逆にいえば、これがなければ人間は単なる動物になり下がるのだ）。

「批判的思考」が、社会に貢献するという意味において、文系は確かに「役に立つ」。しかし「文系の知」の最も上質な価値は、無用な遊びや無用の美という、役に立たないところにあるのではないだろうか。私たちは、文系の本当の価値についてもっと堂々としていていいのかしれない。本当に素晴らしいものは、たとえ役に立たなくても正当化できるはずである。むしろ問題なのは、正当化できない文系の実情である。無用の美に触れる豊かさはもちろん、吉見らの主張する「批判的思

考」や創造性などの「文系の知」が成り立つのは、文系が文系を裏切っていない場合、つまり（教員はいうまでもなく）学生が「真面目な読書人」となり、しっかりとディシプリンを身に付け、膨大な知識とエネルギーを要する研究に取り組むように、きちんとした知の訓練――厳密には情の訓練も入るが――を受けている場合であろう[5]。ところが、今日の文系学部ではどうであろうか。シーツの働くアメリカのある大学では、英文学や歴史専攻の学生の多くが、『モービー・ディック』も『緋文字』も読んだことがないという。学習内容はアイデンティティ・ポリティックスなどのイデオロギーに傾き、文化といえば映画やポピュラー・カルチャーくらいのもので、彼らは本（特に難しい古典）を読まされることはほとんどなく、「批判的思考」も読み書き能力も（工学部の学生と比べてさえ）低いという[6]。

日本の一部の大学にも同じようなことがいえるだろう。今日の文系学部の中には、吉見も指摘するように、世間での「売れ筋」（のみ）を意識した「カナ文字学部」が確かにあり、一体何を学ぶところなのか、何がディシプリンなのかがわからない学部も多い（119頁）。また、学生に「真面目な読書人」となることを要求し、古典を読ませ、きちんとした知の訓練をすることを使命としている文系学部がどれだけあるのかといえば心許ないだろう[7]。言い古されたことだが、新しい価値の創造にしても、過去の知の蓄積を踏まえた上でなければ不可能である。

今日の文系の弱さは教養という「役に立たない」ものを教えることにあるのではない。むしろ、多くの文系学部で、まともに教養らしいものを教えず、きちんとした知の訓練をしていないということにあるのではないだろうか。文系擁護論者は「文系不要論」という外部批判に立ち向かう前に、大学の使命とは何か、文系の使命とは何か、これらをしっかり確認し、内部批判から始めなくてはならないだろう。文系の危機は大学の危機であり、人間らしさの危機でもある。文系がきちんと「文系の知」を提供し、文系の使命を果たすならば、私たちは堂々とその存在を、社会に対して正当化できると信じている。

注

1）例えば以下を参照。Alex Preston, “The War against Humanities at Britain’s Universities”, *The Guardian*, March 2015, available at http://www.theguardian.com/education/2015/mar/29/war-against-humanities-at-britains-universities. Stanley Fish, “The Crisis of the Humanities Officially Arrives”, *The New York Times*, October 2010, available at http://opinionator.blogs.nytimes.com/2010/10/11/the-crisis-of-the-humanities-officially-arrives. Martha C. Nussbaum, *Not for Profit: Why Democracy Needs Humanities*, Princeton, N.J.: Princeton University Press, 2010. Helen Small, *The Value of the Humanities*, Oxford: Oxford University Press, 2013. Emma Mincks, “The Crisis of ‘The Humanities’”, *Highbrow Magazine*, March 2016, available at http: www. highbrowmagazine.com. 1268-crisis-humanities. Sarah Churchwell, “Why the Humanities Matter”, *Times Higher Education*, November 2014, available at http://www.timeshighereducation.co.uk/comment/opinion/sarah-churchwell-why-the-humanities-matter/2016909.article.

2）レオ・シュトラウス（石崎嘉彦・飯島昇蔵訳）『リベラリズム古代と近代』ナカニシヤ出版、2006年、13頁。本書はLeo Strauss, *Liberalism Ancient and Modern*, New York: Basic Books, 1968を底本としている。

3）Roger Scruton, *Beauty: A Very Short Introduction*, Oxford: Oxford University Press, 2009/2011, pp. 21-22.　スクルートンはこの無用の美に対する態度をシャフツベリー（The Third Earl of Shaftesbury, 1671-1713）やカント（Immanuel Kant, 1724-1894）の言葉を使って「無私の関心」（disinterested interest）と呼んでいる。

4）Scruton, *Beauty*, pp. 31-32. スクルートンはここで人間が美を求めるのは、孔雀の雄が尾を見せびらかす

のと一緒だという生物学的理論に対し反論している。

5）Diana E. Sheets, “The Crisis in the Humanities: Why Today’s Educational and Cultural Experts Can’t and Won’t Resolve the Failing of the Liberal Arts”, *Huffpost College*, July 2013, available at http:// www.huffingtonpost.com/dr-diana-e-sheets/the crisis-in-the-humanities.

6）Sheets, “The Crisis in the Humanities”. 英国の哲学者スクルートンも文系について同じような問題意識を有しており、今日の大学の多くの授業で必要とされているのは「知的成長」（intellectual growth）ではなく「イデオロギー的追従」（ideological conformity）だといっている。Roger Scruton, “The Idea of a University”, *The American Spectator*, September 2010, available at http://spectator.org/articles/38984/idea-university.

7）藤本夕衣（『古典を失った大学――近代性の危機と教養の行方』東京：NTT 出版、2012 年）も今日の大学における古典の「軽視」について論難している。

（立命館アジア太平洋大学非常勤講師）